

循環型社会づくりに貢献するため、 廃棄物の排出抑制、リサイクル率向上に努めています。

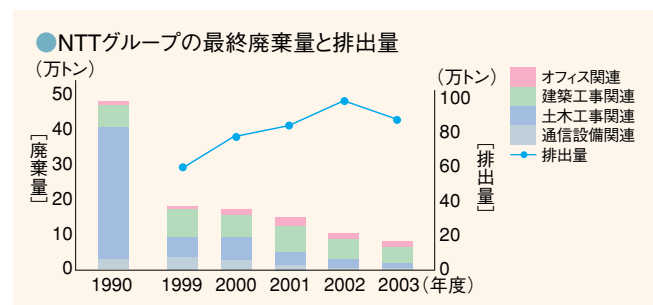
廃棄物の排出抑制とリサイクル率向上を推進

Web検索 15-1

資源循環型のビジネスモデルを形成するには、より少ない資源を効率的に使うことはもちろん、廃棄物の排出量を削減し、同時にリサイクル率を高めていくことが重要です。

NTTグループ主要行動計画目標に「2010年までに、最終廃棄量を1990年レベルの15%以下に削減する」ことを定め、撤去通信設備のリユース・リサイクル、建築・土木工事関連廃棄物のリサイクル、オフィス関連廃棄物のリサイクルを積極的に推進してきました。これにより、最終廃棄量（最終処分量）は1999年度以降減少し、2003年度は7.7万トンになりました。これは、廃棄物排出量が昨年度より11万トン減少したことが大きな要因ですが、リサイクル率が向上したこともよります。

今後も、廃棄物のリサイクル率をさらに向上させ、2010年の目標達成に向けて取り組んでいきます。

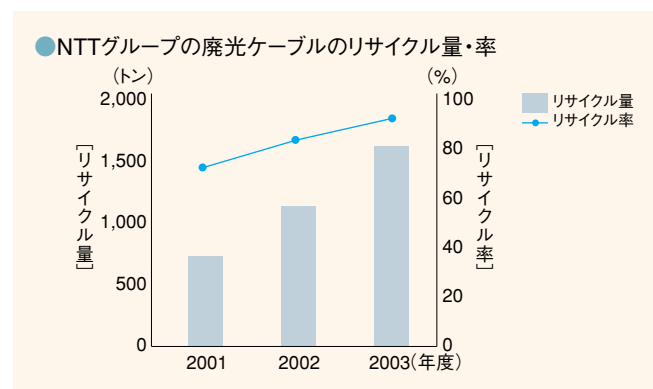


92%以上の廃光ケーブルをリサイクル

Web検索 15-2

ブロードバンド化の進展に伴い、光ケーブルの使用量も年々増加し、廃光ケーブルのリサイクルが大きな課題となっています。廃光ケーブルは従来、焼却による適正処分を行っていましたが、NTTグループは2001年「廃光ケーブルリサイクルシステム」を開発し、ケーブル外被だけでなくコア部分も解体・破碎、個々の材料へ分別することを可能としました。2003年度は、1,760トンの廃光ケーブルを回収し、1,628トンのリサイクルしました。

リサイクル率は92.5%で、これは2002年度に比べて8.7%向上しています。



長寿命エコ鋼管柱の開発で環境負荷低減

Web検索 15-3

鋼管柱（スチール製電柱）は、コンクリート製電柱とともに、電話やブロードバンドサービスを支える重要な通信インフラの1つです。NTT東日本とNTT西日本では、全国に多数の鋼管柱を保有しています。両社は、鋼管柱の地下埋設部分にPET*粉体を塗布することで、地中の水・酸素・塩分に対する防食性を高めた「長寿命エコ鋼管柱」の開発に成功しました。従来のコールタール塗装に比べ、大幅な耐久性の向上が期待されます。

上が図られ、鋼管柱をつくるための天然資源の節約、腐食による建て替え頻度の減少など、環境負荷の低減に寄与します。



リデュース、リユース、リサイクルの3Rを実現したエコ鋼管柱

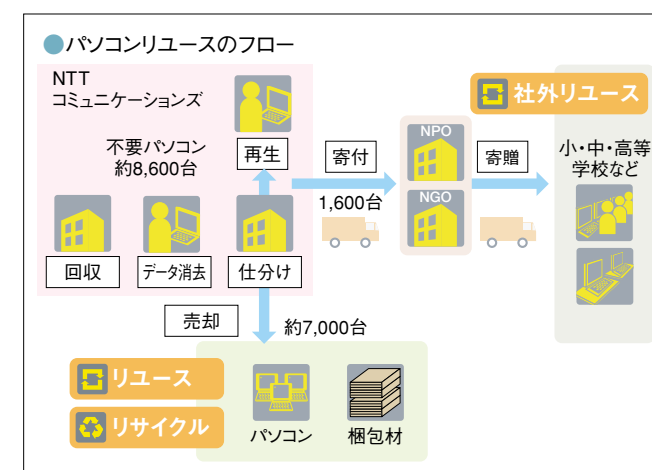
1,600台のパソコンを全国の小・中・高等学校などへ

Web検索 16-1

NTTコミュニケーションズでは、全社のパソコン更改に伴い、「社内で不要になったパソコンを極力リユースする」という環境方針のもと2003年10月から年末にかけて、環境NGO団体を通じて600台、NPO団体を通じて1,000台のパソコンを全国の小・中・高等学校などへ寄贈しました。

また、不要となった寄贈以外のパソコンおよび不要となったパソコンの回収に伴う梱包材もリユース、リサイクルを行い、関係社員一丸となって取り組んだ結果、廃棄物をゼロにすることができました。

なお、機密情報漏洩防止のため、不要となったパソコンのハードディスクはデータを完全に消去するなど、セキュリティの徹底も図っています。

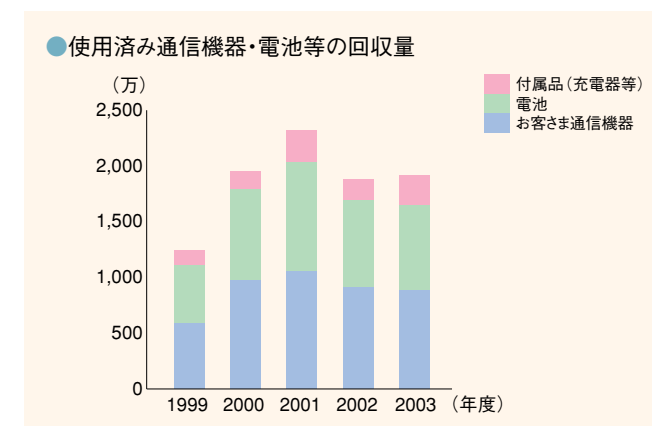


使用済み通信機器などの回収

Web検索 16-2

NTTグループは、環境保護活動の重要課題の1つとして、不要となった通信機器や付属品の回収に取り組んでいます。NTT東日本、NTT西日本では、コードレスホンなどに使用する小型二次電池（ニカド電池、リチウムイオン電池など）や普通紙ファクスで使用するトナーカートリッジなどの回収を積極的に進めています。NTTドコモでは、携帯・自動車電話やPHS本体、電池、充電器などの回収に取り組んでいます。

2003年度は、お客さまのご協力のもと、NTT東日本とNTT西日本で小型二次電池を32万個、NTTドコモグループで本体884万台、電池736万個、充電器など268万個を回収しました。



携帯電話事業者として初めて卓上ホルダの再生プラスチックを利用

Web検索 16-3

NTTドコモは、2003年5月より携帯電話事業者として初めて、使用済み携帯電話の卓上ホルダから再生したプラスチック（ABS）原料を、卓上ホルダの素材として採用しました。従来、回収したプラスチック部品は、自動車部品など他の業界で利用されてきましたが、携帯電話の部品として再利用することで、流通経路を簡素化するなど、効率の良いリサイクルが可能になりました。



再生したプラスチックを利用した卓上ホルダ